

- ◆日本の木の家づくり
- ◆旭木の駅プロジェクト
- ◆矢作川の水量を考える
- ◆矢作川資料研究第2集『枝下用水120年史資料集』発行のお知らせ



日本の木の家づくり

中島 紀于

岐阜県中津川市^{かしも}加子母は木曾川支流飛騨川の、そのまた支流白川の源流地域です。面積は 114km²で、その95%が山林、標高約 500～700 m、人口 3,300 人の農山村です。御岳山の南山麓に位置していますが、この一帯は木曾檜の天然更新で有名な桧の大産地です。江戸時代はこの木曾檜の保護のため、尾張藩が直轄地



(wikipediaより転載)

図 加子母の位置

として加子母、付知、川上を治め、木曾五木（ヒノキ、サワラ、コウヤマキ、アスナロ、ネズコ）を厳しく保護しました。木曾五木は江戸城、姫路城、法隆寺等の大型建造物に太物、長物として使われています。



写真1 加子母遠景

この地に生れ育った私達は、昔からの木を扱う技術を受け継ぎながら生計を立てています。明治維新後、里山は地域住民に払い下げられ、900戸余りのどの家も3～5haの山林を所有し大切に木を育てています。

その昔は家を新しく建てる時、自分の山の木を使いました。娘が嫁ぐ時の仕度で、あるいは子供が学校に行く時に、山の木を売りました。今から50年前には樹齢80年の桧の立木は、山で立ったままで1本10万円で売れました。今では5万円です。賃金が15倍になっていますから、実質は三十分の一に下がってしまいました。昔貯蓄だった山の木は今では貯蓄になりません。それでも私達は山に林道と作業道を作り、間伐し枝打ちして「東濃ひのき」を大切に育てています。昔30社あった製材屋が今は半分に減りました。それでも東濃ひのき柱を挽いています。昔都会の市場へどんどん売れた柱も殆んど売れなくなりました。だから、関東、中部、関西で「東濃ひのきの家」を直接受注して、加子母の木材を家づくりに使っています。200年も300年も長持ちする家づくりは本物指向、自然素材の見直しの風潮に乗って少しづつ伸びています。

戦後66年たって日本の山の木は大きく育って来ました。日本の木材を使って、日本の家づくりをする事で、日本の山を守る時が来ました。特に二酸化炭素の削減は、山の木の成長によるしかないのです。又雨が降ったら、この広い山の豊かな土の中に貯え、一滴ずつ流して大切な飲み水や農業用水に使うしかないのです。

国土の三分の二は山です。この山の自立なくして日本の自立は無いと信じて家づくりを頑張っています。昭和40年代からずっとハウスメーカーによる家づくりが続いて、その結果日本の木が売れなくなり、安く



写真2 東濃ひのきの家

なっていました。今のままでは、山の木を扱う人が居なくなってしまいます。そうなったら、私達の田舎は潰れてしまいます。私達が住んでいるからこそ、冬は寒くて貧乏で不便な加子母も荒れてしまうことが無いのです。加子母に生まれた子供も回遊して帰ってくるのです。家づくりをもっともっと盛んにして、この地域の木を日本中の皆さんに使って頂いて、この地域の山を守っていきたくと思っています。

急峻な高い山のすくすく育つ木達と、美味しい沢の水と、青く澄んだ空と、こぶしや山桜の花に会いに加子母へ来てください。楽しみに待っています！！

(なかしま のりお、中島工務店社長)

旭木の駅プロジェクト

西川 早人・杉野 賢治

「旭木の駅プロジェクト」は、森林を良好な状態に整備し、放置材（伐り置き間伐による林地残材）を地域の発展と地球の環境のために有効に活用することを目的として実施しました。放置材を実勢価格より高く買い入れることで、放置材の有効利用と、山仕事の復権をめざす取り組みです。これまでハードルが高かった木材出荷を、軽トラックに積載できる2m足らずの短材でも気楽に出荷できるようにすることで、より多くの方が山仕事に関わる事が出来るような仕組みです（図1）。さらに、その対価を地域通貨「モリ券（図2）」で支払うことで地域の活性化を図ろうとするものです。この取り組みはすでに、土佐（高知）、恵那（岐阜）、智頭（鳥取）で行われ、全国に広がりを見せています。

出荷者は旭地区在住もしくはは在勤であること、対象とする森林は旭地区内に限られます。裏山で半ば放置されていた間伐材が、孫のお土産や晩酌のお酒に変わります。しかも、モリ券には使用期限（約2か月）があり、使用できる商店（登録制）は旭地区だけです。山の恵みが地域で循環・完結します。大儲けはできないけれど、関わったみんな

がちよっと幸せになれるしくみです。

対価は1トンあたり6,000円（1㎡あたり5,000円）です。6,000円の内訳は、3,000円分がチップ業者による買い取りで、残り3,000円分をNPO法人都市と農山村交流スローライフセンター、矢作川水系森林ボランティア協議会、組手什東海からの寄付でまかないました。今回は補助金は使わず、志ある民間企業、NPOの協力の下で進めてきました。豊田地区における「木の駅」のモデルづくりのための社会実験です。

「旭木の駅プロジェクト」の経過は以下の通りです。

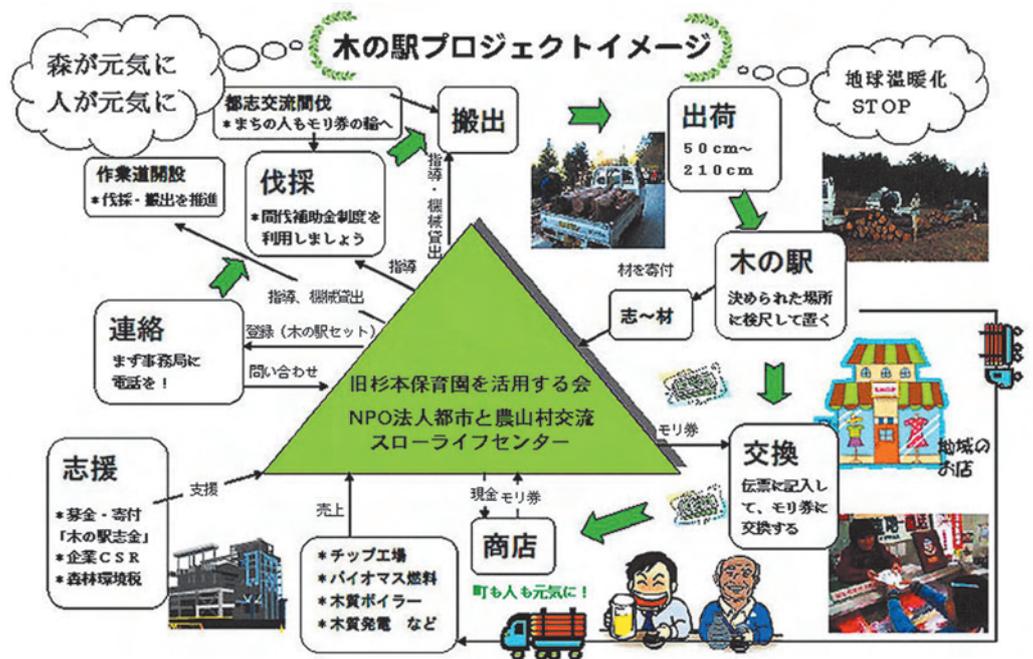


図1 木の駅プロジェクトのイメージ



このモリ券はガソリンスタンドでは使用できません

発行：旧杉本保育園を活用する会、NPO法人都市と農山村交流スローライフセンター 協力：豊田市役所旭支所、旭商工会

モリ券とは

- ・モリ券は間伐、林地等の搬出など「森林の保全誘導」に資するものとして発行されます。
- ・モリ券は1モリで日本国通貨1千円以下の価値を持ち地場産品や地場サービスなどと交換することで「地域経済」を促進します。

注意

- ①モリ券は金券でも地域振興券でも商品券ではありません。
- ②1,000円以内単位で切り上げとなり、差額は「木の駅志金」への寄付となります。
- ③日本国通貨によるおつりも出ませんし、日本国通貨との混合での利用もできません。

モリ券交換履歴

月 日	氏名	何と交換したか

図2 モリ券

2010年12月27日に旭支所（支所長以下3名が参加）、旭商工会（会長以下3名が参加）、地元（3名が参加）事務局を対象とした学習・説明会を実施しました。2011年1月26日には地域への説明会（約50名参加）を行い、翌日には出荷者・商店の登録を開始しました。材の出荷とモリ券の使用を開始した3月5日には出陣式を行いました（写真1、2）。3月27日には出荷を、5月8日にモリ券の使用を終了しました。

目標としていた出荷材積50トンに対して、最終的には倍近い90.84トンが集まりました。モリ券発行枚数は360枚（1枚1,000円、木材1トンと6枚を交換）でした。出荷登録者は32人で、実際に出荷したのは24人でした。参加した商店は19店で、業種は林業資材、酒類・食品、衣類、居酒屋、薬、旅館、喫茶、うなぎ、コンビニ、菓子類、写真、スナックでした。また、多くの方々と団体から資金と木材の寄付を頂きました。

以下は地域の皆さんの声です。

<出荷者の声>

・年に何回かやってくれるといいな ・とにかく続けてほしい ・えらいけど、うれしい（出材は疲れるが、山に入れるのは喜び） ・まだ、モリ券を使ってないがなんでもありそう。（街までいなくてもたいていのものは地元にある） ・土場がもっとたくさんあるといいな（4方面ぐらいにあると出しやすい） ・ところどころでチェーンソーの音がすると、うれしい ・モリ券は、使ってみると案外すんなりと使えた などなど。

<商店の声>

・本当にお金がもらえるんだね ・嬉しそうに買い物を

してくださって、こちらまで嬉しい

・普段買えない商品を買っていくと言われた ・少しだけど、確実に売上が伸びた。ありがとう ・換金がめんどうくさい

今後は5月中にアンケートを実施し、6月6日（月）午後7時から豊田市旭支所2階会議室で報告会を行う予定です。

この社会実験は大きな反響を呼んでいるようです。「今まで気になっていたけど、目が向けられなかった山に人が入った」「じゃまものだと思っていた放置材が、金になった」「久しぶりに地元の商店で買い物をした」など。

「ほんとに、やってよかった」というのが、関係した人々みんなの気持ちだと思います。そして「なんとか続けて

いきたい」とも強く思っています。6月の報告会で、今後の方向を決めていきます。これからは参加したみなさんの力で「山」を「地域」をどうするかが、決められます。多くのみなさんの思いを集めたいものです。（NPO法人都市と農山村交流スローライフセンター、

にしかわ はやと・すぎの けんじ）



写真1 出陣式（2011年3月5日）



写真2 出陣式当日、ずらりと並んだ出荷者の軽トラック

矢作川の水量を考える

山本 敏哉

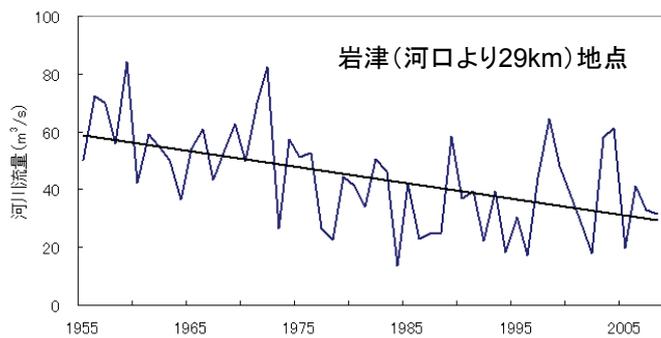


図 過去50年の本川流量の経年変化

矢作川を流れる水の量は50年前と比べて相当に減っているのを皆さんはご存じでしょうか。図は、国土交通省が観測した過去50年以上にわたる年ごとの平均流量の変化をグラフにしたものです。流量の減少する傾向がここから読み取れます。計算したところ、1994年から15年間の流量（毎秒36.7トン）は、1955年から15年間（毎秒56.7トン）のそれと比べると35%も少なくなっていました。同じ期間の降水量は、記録が残っている名古屋市のデータを参照した限りでは、2%の減少にとどまっていたので、降水量の減少以外に原因があるといえます。

この原因には第一に、人間による取水があげられるでしょう。130万人が暮らす矢作川流域では農業、工業それに飲料用に川を流れる水の40%以上が使われています。高度経済成長を経る中で、取水量が増えるのは当然のことです。だがそれ以外にも原因はありそ

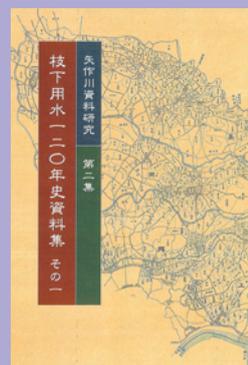
うです。私は余暇を利用して、日本各地の川を訪ね歩くことを楽しんでいます。ここ2年は徳島県南部の海部川を訪れています。この川は流域面積こそ矢作川の4分の1以下に過ぎませんが、ダムがないことはもちろん、四国でもトップクラスの水の透明度を誇り、生き物の豊富さと川本来の景観を残している点で川を知る多くの人が一目置く存在です。ですが、驚いたことに、ここでも目立って水量の減少が起きているらしいのです。地元で育ち、海部川の写真を撮っている40歳すぎの人からは「私が子供のときと比べて水位が2mは減ったと思う」と言われ、また60代の民宿の主人は「昔は舟で川を渡ったものだが、いまは全くその必要がない。間違いなく1mは下がっている」と言われました。お二人とも水量が減ったのは植林の影響だと推測されていました。

矢作川でも上流の渓流域でアマゴ釣りをする人から、「水量が減って矢作川水系ではアマゴ釣りが楽しめなくなった」との話をききます。森は保水力を高めるイメージがありますが、植林の増大と木材需要の低迷で森林の水循環が変化したことが矢作川の水量の減少に拍車をかけているのかもしれない。川の生き物にとってもこうした水量の変化は生息空間の減少を意味し、多大なる影響を及ぼす恐れがあります。いま矢作川研究所では「水量」をキーワードに、広く課題を整理する作業にとりかかっています。

(やまもと としや、豊田市矢作川研究所主任研究員)

▶ 矢作川資料研究第2集『枝下用水 120年史資料集』その1ができました。

2008年度より枝下用水120年史編集作業が始まり、このたびようやく資料集その1を発行することができました。その1は枝下用水開削の始まる1880年代から1929年の越戸ダムが完成するまでを取り上げました。ご興味ある方、矢作川研究所へお問い合わせください。
【担当：達】



後記

今回は地域材利用の取組を紹介しました。加子母ではブランド材を使った伝統の家づくりが継承されています。木の駅プロジェクトを全国に広めている矢森協代表の丹羽健司さんによると、同プロジェクトと間伐材を使った棚作成キット「組手什」の製作が、被災した宮城県でも始まるようとしているそうです。各地で多様な形の地域材利用が進み、地域を元気にしていくことを願っています。(洲)